



兒こ雷らい也や豪傑こうけつ譚たん
 上の卷
 三十一篇



^13
 3878
 77



門 へ 13
 3878
 77

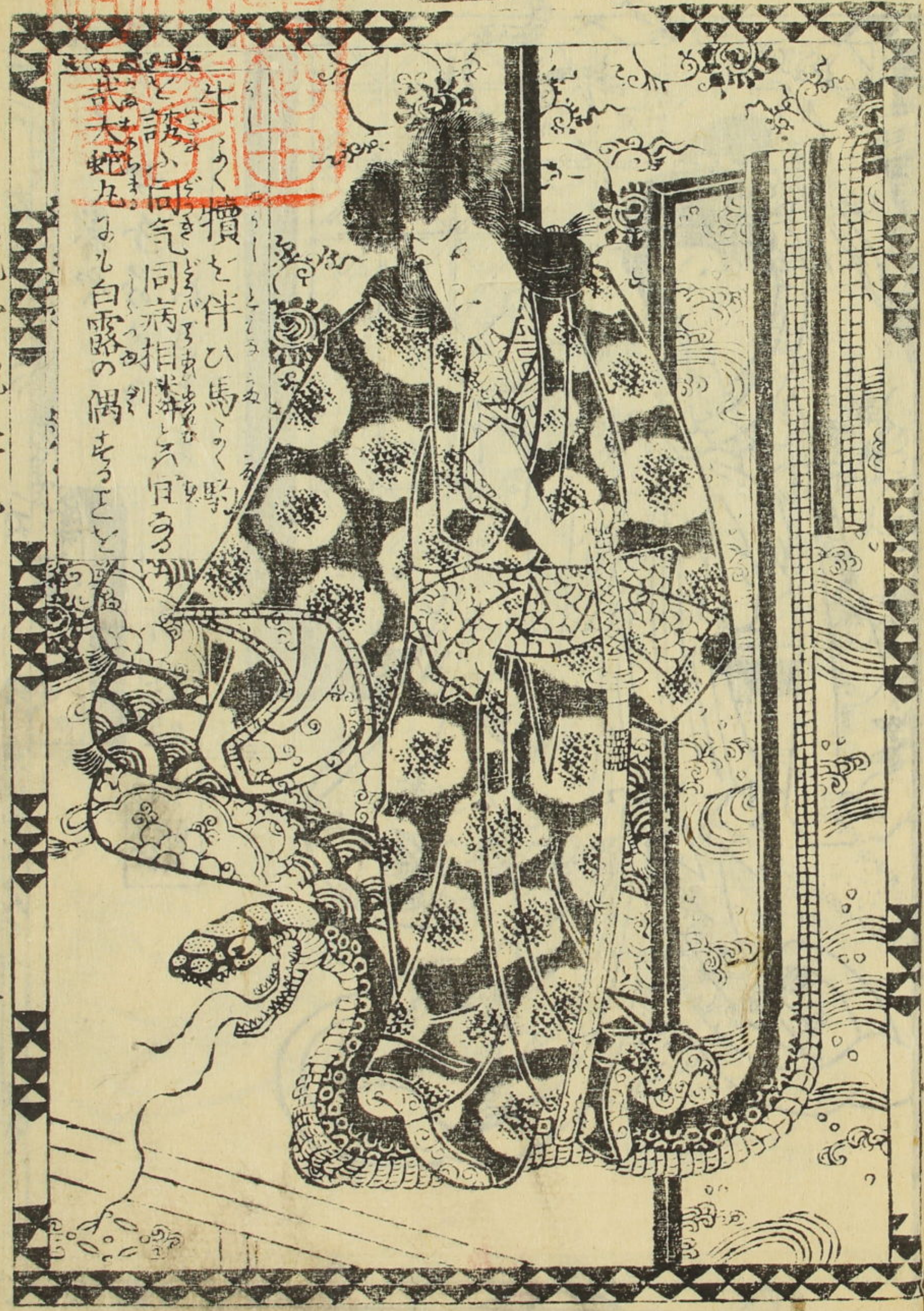
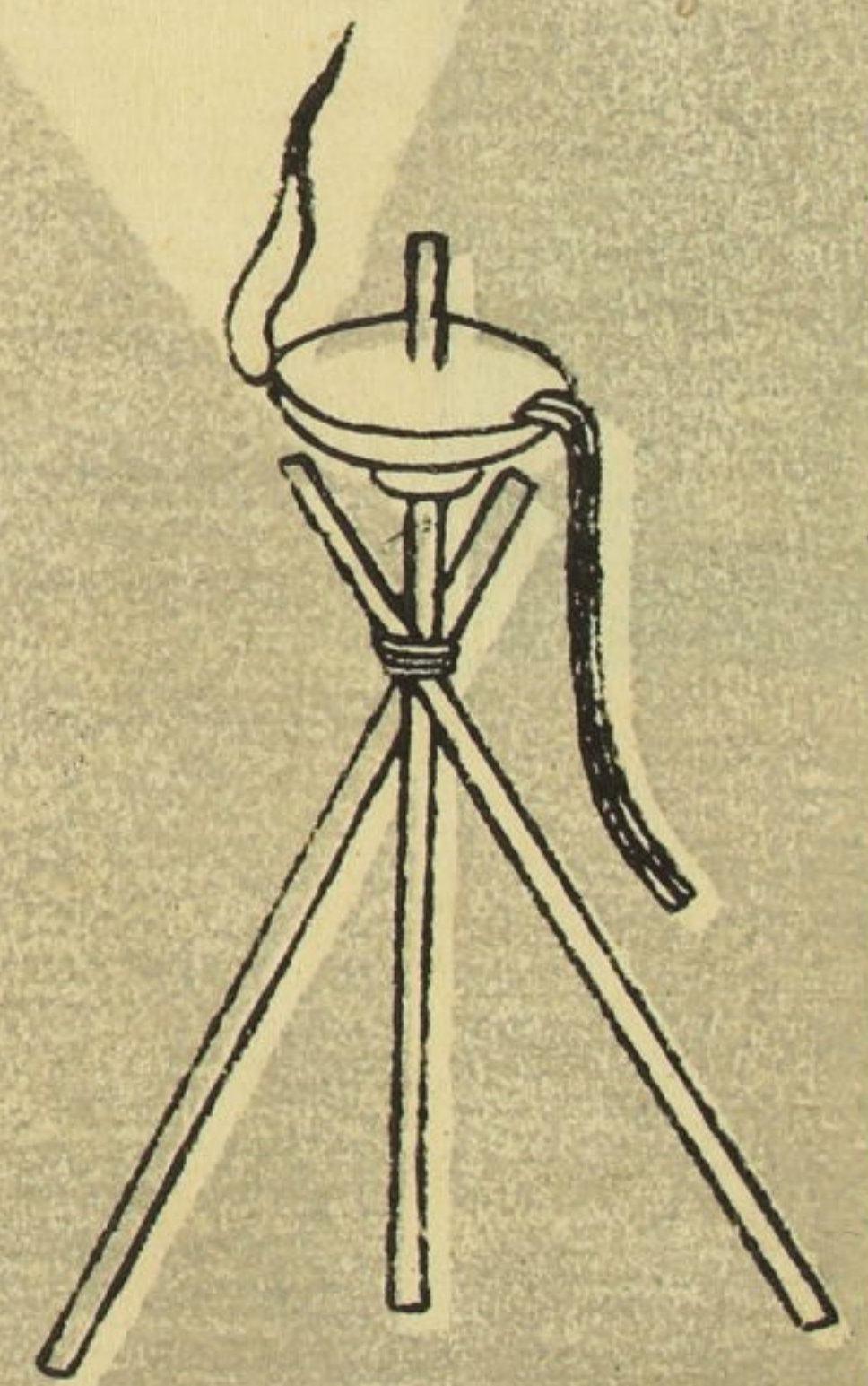
兒雷也
 豪傑譚

上卷

一 桺の亭作
 壽画



梶市泉



牛を伴ひ馬を騎
 と護つ同病相憐れ
 武大蛇九も白露の偶

已雷也三十九

あつゝ家や
あつゝあつゝあつゝ
あつゝあつゝあつゝ

新遊妓白露



古遊君守河大夫

白露が本身の遠州横ヶ池
の大蛇はて周馬と暮を二
駿府弥勤街の色界よその身と
沈るは是や因地の高聖が弥勤
の出世をまろふ竹合を然ハ
の色も遂り大蛇丸が
妻とありて毒を醜と大火
坑乃天と焼んとする性なり

己の己の己

天然はて假名は通詞
 帯へびの蚊屋のつとま
 素より設るあやむねど
 對画の趣向に二品を得
 たるもまことに奇異なる也



鉦子戀情の鶏卵酒兒雷天下小鞞軒蛇がふるぬの蝦蟆を覗めば
 蛙蟬眼前に出現ると唐の揚烟が五言絶句と越後あんに翻訳
 たる這兒雷也の柳史乃所要奥議を開て視せ稟さんよ聖書と
 壁小藏をこつ科斗の文字乃と書籍其故更に手足と漆
 て蝦蟆を利するものは大標首小雷と遣の科斗よ雷の鳴
 と聞て尾落然して足生ト蛙と変ると云詞も蝦蟆と兒雷也
 に帰るもの欣然とる深意は左ま右まれ吾等が於玉枝子
 と狭の此身と極揚らして柳下一頭の家部流とあつた柳の枝
 小躍騰り小野の道風と驚し傘乃蛇の目らち確うせん
 蛙蟬半尺筆のころせむ七師の遺稿ま拙序をかぬ

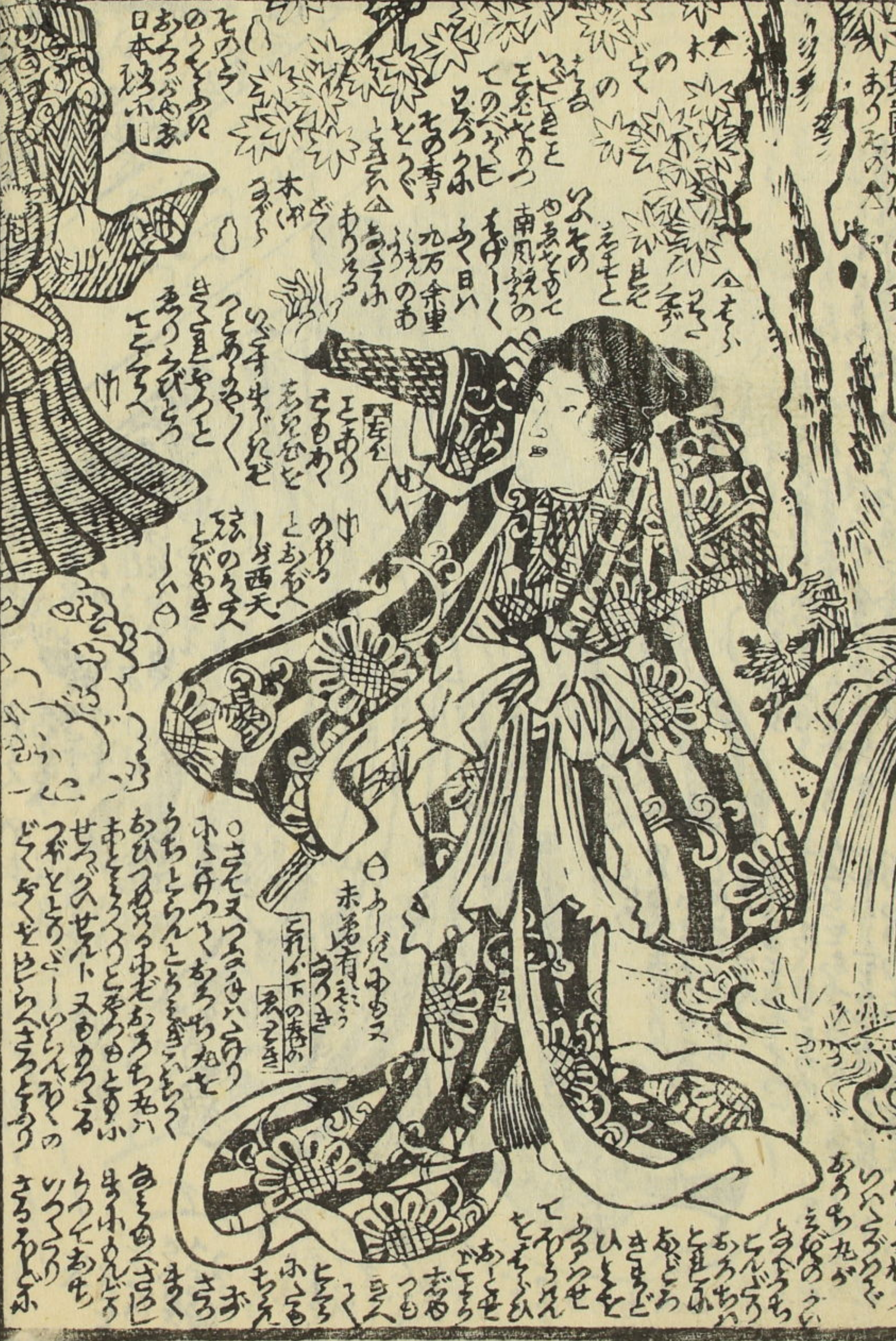
文久二拾
 壬戌初春

柳水亭種清記

白田廿三

三

万葉集 卷第十一
 南蛮にてちくのかのそとを
 伊蘭林が嶺との土地
 ありその大

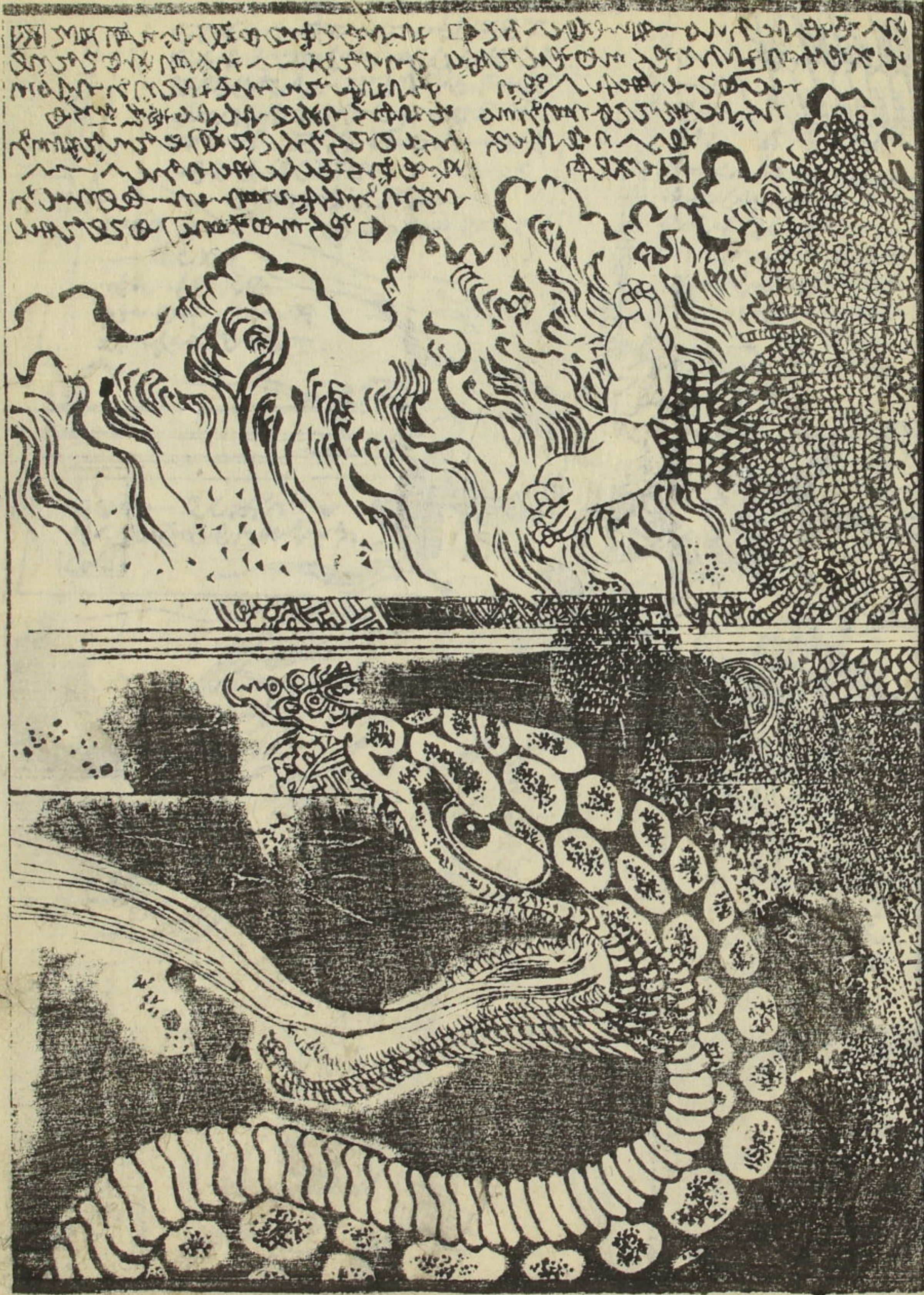


そのまゝ
 ありその大
 日本
 万葉集
 卷第十一
 南蛮にてちくのかのそとを
 伊蘭林が嶺との土地
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大

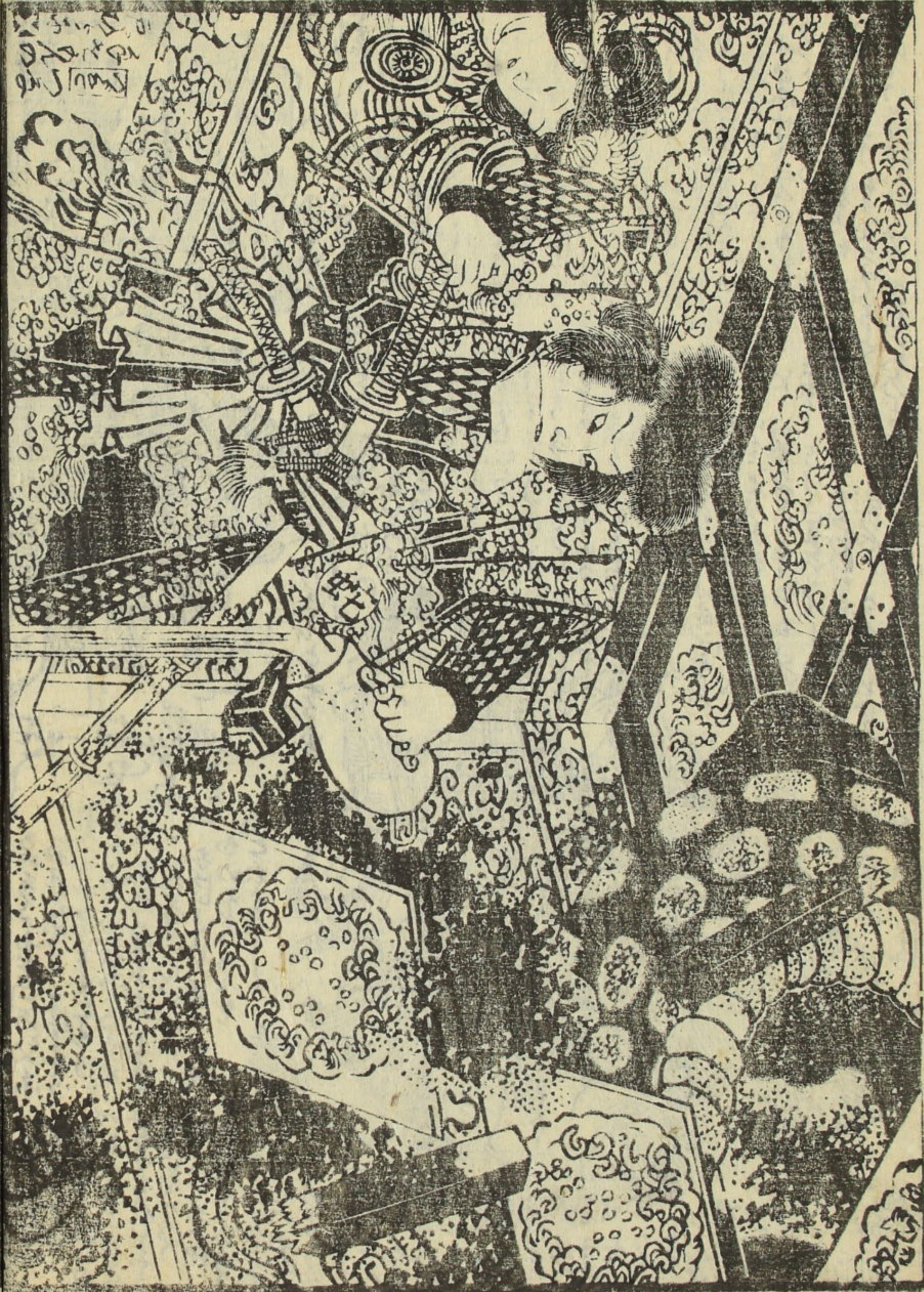


万葉集 卷第十一
 南蛮にてちくのかのそとを
 伊蘭林が嶺との土地
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大
 ありその大

万葉集 卷第十一



龍の火を吐く



煙草を吸う

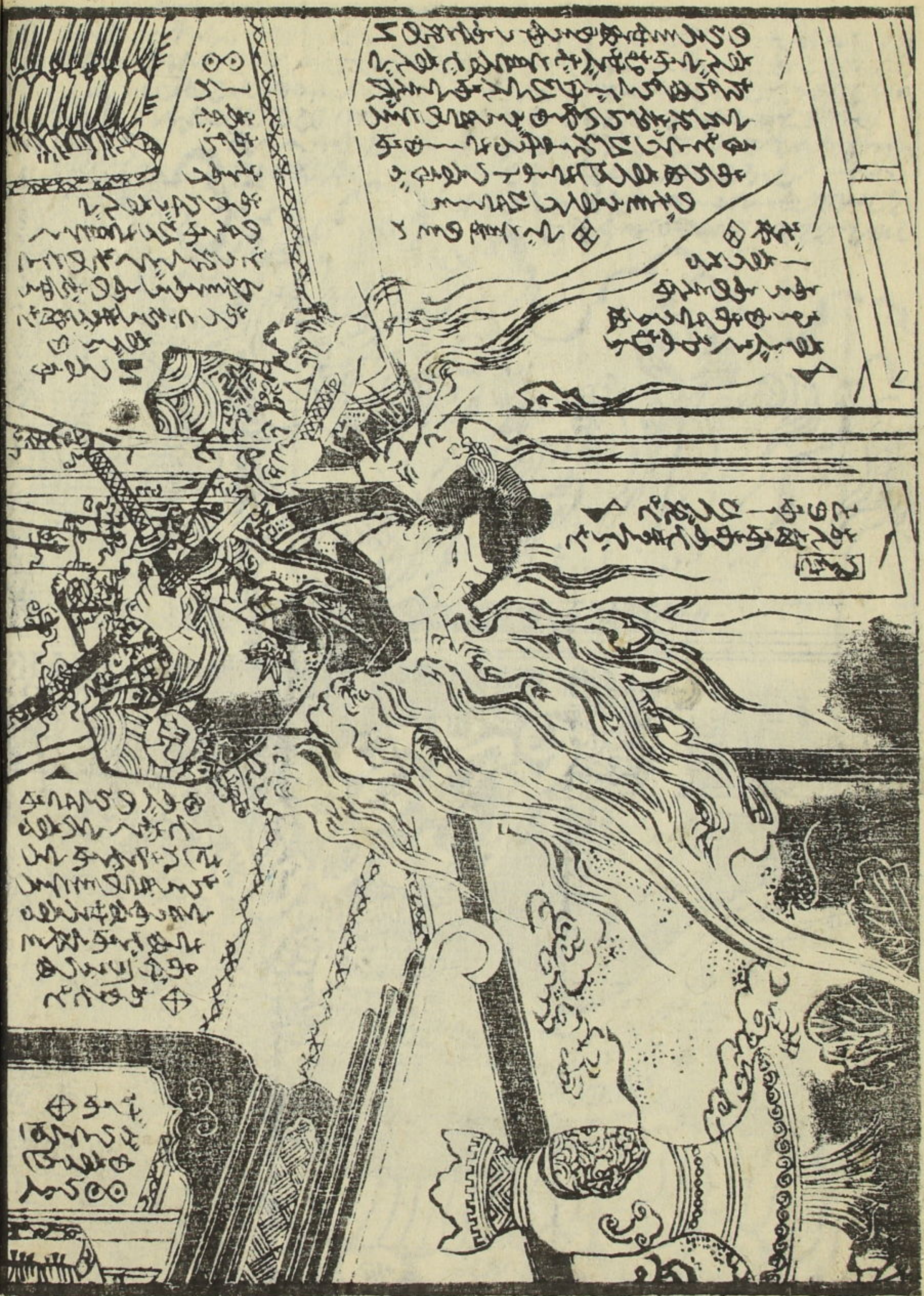


三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三



三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三

三三三
三三三
三三三



伊豫大掾憲形海中
 漂して不計姑踏
 丸の宝劔と得る

伊豫大掾憲形海中
 漂して不計姑踏
 丸の宝劔と得る

柳下亭種員稿

一惠齋芳幾画

一光雷也豪傑潭

四拾七篇

一一休草紙

拾五篇

一風俗談問答

拾四篇

一黄金水大盡盃

拾七篇

書肆 地木 問屋

芝神明前
 和泉屋
 市兵衛

銀座四丁目
 同支店

